

安倍首相、「大学9月入学」と 「ボランティア活動」に意欲！

旺文社 教育情報センター 18年10月

9月26日に発足した安倍新政権が唱える“美しい国づくり”政策の一つに、「教育再生」を掲げている。その具体的政策の一環として、大学の「9月入学」と高校卒業から大学入学までの約5か月間の「ボランティア活動」導入に意欲を示している。

<提唱の背景>

安倍首相は、近著『美しい国へ』（文春新書）や講演の中で、政権構想の柱となる「教育再生」の一環として、大学（国公立大）の入学時期を9月に変更し、高校卒業から大学入学までの間にボランティア活動を義務付ける施策を唱えている。

「教育再生」には学力向上だけでなく、教育を通じたモラルの回復が不可欠だとみて、ボランティア活動を教育の一環として行うことを提唱している。

入学時期を欧米と同じ9月にすれば、その間にボランティア活動が行え、さらに留学生の受入れ・派遣の促進にもつながるといえることであろう。

<大学の秋季入学>

大学の入学時期やボランティア活動についてはこれまで、様々な場で議論、提言されてきた。

●大学審

- ① 旧・大学審議会は平成10年12月、「21世紀の大学像と今後の改革方策について」で、秋季（9月）入学について、次のように提言している。

学年暦の異なる諸外国への留学及び我が国への留学生の受入れを促進するため、また、9月入学をより柔軟に導入できるようにするため、学年の途中における入学に関する学校教育法施行規則の規定を改正するとともに、学習効果を高める上でも効果の高い Semester 制を、これまで以上に積極的に推進していく必要がある。

- ② また、同審議会は12年11月、「大学入試の改善について」においても、秋季入学の拡大として、次のように提言している。

秋季入学については、学校教育法施行規則の改正により、平成11年度から各大学の判断により柔軟に導入できるようになったところである。

現在のところ、秋季入学は、一部の大学が取り組んでいるにとどまっており、また、その多くが、欧米諸国等我が国と学年暦の異なる国との円滑な交流を図る観点から、留学生や帰国子女等を対象にしたものである。

今後は、受験生の選択の幅を広げ、多様な学習計画を可能にするといった観点からも、各大学において、一般選抜における秋季入学の導入を積極的に行うことが求められる。その際、1月の大学入試センター試験の成績を、秋季入学の選抜において活用することも考えられる。

併せて、学期ごとに授業が完結する Semester 制の導入等、秋季入学を円滑に導入するための大学教育の工夫・改善も行われることが求められる。

また、秋季入学者については、大学を卒業する時点が他の学生と異なる場合も考慮し、企業の採用活動における配慮を期待したい。

●教育改革国民会議

ボランティア活動については、「臨時教育審議会」(中曽根康弘・元総理の諮問機関、昭和59年～62年)で提言されてきたほか、森喜朗・元総理の私的諮問機関であった「教育改革国民会議」(「教育を変える17の提案」;12年12月)でも、次のような提言が盛り込まれている。

国際化を促進し、高校卒業後の学生に社会体験などの時間を与える観点から、大学の9月入学を多くの大学が実施するよう積極的に推進する。

<秋季入学の現状と課題>

秋季入学についてのこれまでの観点としては、上記の提言からもわかるように、「留学生や帰国子女に対する円滑な移動」と「大学入学機会の拡大」(旧・大学審)及び、「国際化の促進」と「奉仕活動の推進」(教育改革国民会議)である。

現在、大学の入学時期は、ほとんどが4月を基本としており、国公立大では筑波大など、ごく一部に帰国子女に配慮した9月入学が見られるほか、私立大では、早大・立命館アジア太平洋大・東洋大・杏林大・富山国際大・福岡国際大・宮崎国際大など、一部で一般受験生向けの秋季入学を実施している。

しかし、高校の卒業時期と大学入学時期、大学卒業時期と入社時期とのそれぞれ時間的なズレ(空白)が解消されていない現状では、一般受験生の秋季入学への関心は薄いようだ。秋季入学を推進、拡大するためには、小・中・高校も含めた学年暦の見直し、及び企業や官公庁の就職・採用時期の配慮が必要である。

<大学の秋季入学は、“賛否拮抗”>

内閣府は13年7月、大学の国際化に関し、「秋季入学」についての世論調査を行っている。以下に、その一部(概要)を紹介しておく。

- 秋季入学への関心
 - ・ 学校(幼稚園から大学)の秋季入学に関心があるか、ないか。
関心がある=31.6% 関心がない=64.5%
- 秋季入学に対する意見
 - ・ 国際化を図る観点から、入学時期を世界の多数の国にあわせるべきである。
そう思う=42.1% そうは思わない=49.8%
- 大学の秋季入学導入への賛否
 - ・ 大学の入学時期を原則秋頃(9月)に改める(入試時期は各大学の判断)ことについて。
賛成=40.7% 反対=40.5%
 - ・ 大学の秋季入学導入に賛成の理由
 - ① 欧米諸国では9月入学としている例が多く、留学などに都合がよい=51.2%
 - ② 高校卒業後大学入学までの半年間に、ゆとりをもって進路決定ができる=45.4%
 - ③ 高校卒業後大学入学までの半年間を活用した大学入試の実施が期待できる=27.5%
 - ④ 高校卒業後大学入学までの半年間に、地域社会の活動などに参加しやすくなる=26.3%
 - ⑤ 夏頃に入試を実施した場合、高校教育が時間をかけてしっかりと完了できる=24.7%

・大学の秋季入学導入に反対の理由

- ① 現行の制度で特に支障はない＝58.0%
- ② 高校卒業後大学入学までの半年間どこにも所属しないことは、不適當＝33.2%
- ③ 入学時期と年度とにずれが生じることで、生活上、経済上様々な不都合が生じる＝33.0%
- ④ 半年間の空白期間が無駄である＝24.7%
- ⑤ 桜の咲く頃に入学するのが日本人に合っている＝24.3%

○ 高校卒業から大学入学までの時期の過ごし方

・大学入学時期が9月となった場合、高校卒業から大学入学までの半年間、何をして過ごすか。

- ① 入学試験の受験とその準備＝47.3%
- ② アルバイト＝43.9%
- ③ ボランティア活動＝23.7%
- ④ 長期間の旅行＝21.8%
- ⑤ 趣味、教養＝21.4%

<大学入試時期との関わり>

大学への入学時期は現在、各大学が学年の始期と終期を定める中で柔軟に決めているが、これを9月入学に統一するとなると、学校教育法などの法改正が必要となる。

また、受験生にとっては、入試がいつになるのか、一番の関心事であろう。現行と同じように、卒業時期を挟んで入試が行われ(合否が決定)、卒業後にボランティア活動 大学入学となれば、現在とあまり変わらない入試日程だ。しかし、アメリカに見られるセメスター制(2 学期制)やクォーター制(4 学期制)による学期ごとの入学が可能(S A Tは頻繁に実施されている)で、ボランティア活動も入学評価の対象となるようなシステムに近くなると、受験生にとっては大きな変化だ。高校側にとっては、3 学期が入試で潰れることはなく、本来の高校教育が完遂できるメリットもある。ただ、そのような場合でも結局、卒業から入試までの“空白”(“浪人”とは言わない?)を、予備校や塾が埋めることになるのだろうか?-----。

<安倍構想の実現には、道遠し?>

大学の9月入学統一やボランティア活動の導入について、現状では学校や企業など当事者の意識は薄く、立ち消え状態にある。

●19 年度から、全都立高校で「奉仕活動」必修化

規範意識や帰属意識などの涵養が求められている中、東京都教育委員会は19 年度から、全ての都立高校を対象に奉仕体験活動の必修化(学校設定教科・科目として位置づけ)に踏み切る。都立高の生徒は卒業までに1 単位以上、奉仕について学び、奉仕体験活動を行うことになる。今後、こうした動きは、広がる方向性を持っているとみる。

しかし、安倍構想のような、大学の9月入学とボランティア活動とをセットにした構想には国民世論の幅広いコンセンサスが不可欠で、実現に向けての道のりは遠いようだ。